

# 痴愚譚・智略譚・誇張譚の韓日比較

尹 美 淑

## I. 序 論

### 1. 研究史概観及び研究目的

韓国で行った民譚の研究はおおよそ戦前と戦後に分けて考えることができる。もちろん民譚の研究は民譚という具体的で厳密な範囲の中で行ったのではなく説話という広い概念の枠の中で成り立ったのである<sup>1)</sup>。

説話研究は独立運動期（1919 - 26）に民俗学または民俗史的な関心からはじめ、日本の植民史観による研究とこれに対立して民族主体性を確立するという名のもとで研究が主流になった<sup>2)</sup>。

おおよそ説話研究は文献説話が主にその対象になってきただけで、口伝説話の研究はあまり活性化されなかった。その上に比較研究の試みは最も少ない状況であった。

比較研究は1927年8月以後15回に亘って「新民」という雑誌に「朝鮮民族説話の研究」を発表した孫晋泰教授により本格的に始め、これらは解放後1947年に単行本として刊行されたのである。

孫晋泰教授は中国・日本・モンゴルなどの隣の国と説話を取り交わす過程を追跡して、韓国説話の特徴を明らかにしようとしたのである。しかし、同一類型の説話がどこから先に生じたのかを納得できるように考証されなかったのである。

黄貝江教授の「新羅佛教説話研究」と金鉉龍教授の「韓中小説説話比較研究」ではインド・中国の説話が流入され、変貌された様相を取り扱い、口伝説話に対する考慮が欠乏され一面的な作業に留まったのである。

成蒼説教授の「韓・日民譚の比較研究」は国際的な伝播に関して意欲的な試図をしたが、『韓国口碑文学大系』を活かすことができなくて資料の不均衡があり、方法論的な問題が解消されなかったのである<sup>3)</sup>。

民譚が口伝によって伝播するというのは隣接な二つの民族の間に流伝している民譚が遠く離れている民族の間でのそれよりもっとお互いに近似している形で現れるというのができるところが、韓・日両国の文化的な接触が、両国の地理的な条件のためその関係が頻繁したのを思い出せば、韓・日民譚の比較研究はほかの説話よ

1) 成蒼説『韓日民譚の比較研究』一潮閣、1979年、36ページ。（以下の韓国の引用文に関しては筆者の訳によるものである。）

2) 崔雲植『韓国説話の研究』集文堂、1971年、129ページ

3)

趙東一「韓国説話の研究の現況」、『韓国・日本の説話研究』仁荷大学校出版部、1987年、6ページ

りももっと大きな研究の価値を持っていると思う。

特に、笑話は内容の自らが持っている短編性及び珍しい話を求めようとする話者と聴者の共通的な要求によりやさしく伝播するのである。

民譚がある地域からほかの地域へ伝播されるとき変異した形を発見されるが、民譚そのものの motif は目立つ変化なく維持することができる。しかし、その motif を取り囲んでいる外形的な構造または登場する主人公だちの変異を招来するだけで、このような変異はその民族の風習・心理・社会的な諸側面を根拠として成り立つようになる<sup>4)</sup>。

韓国と日本の説話の中で笑話に現れる変異要因がその民族の民族的特性とどのように結び付けて現れているかを分析するのが本研究の核心である。

本研究では両国の類似した笑話を対比、共通点と相違点を辿りながら、変異が現れた原因を明らかにしようとする。

## 2. 研究範囲及び方法

本研究では韓・日両国に記録で定着された口伝民譚の中で motif と類型が似ている笑話を参考として引用しようとする。

笑話は笑いを与える短編的な物語である。人間の愚かな行動を強調する極端的な誇張の中でも平凡な人間の人間性を描く内容で、現実生活の中で取材し、現実生活に即応して語るもので

あるから、各民族の機智・諧謔・趣味などが現れている。従って、笑話には最も民族的な特性がよく現れていることから、本研究の対象としたのである。

研究に使用された資料は韓国で最近まで調査、報告された説話集<sup>5)</sup>と精神文化研究院の『韓国口碑文学大系』、日本の昔話集を主に笑話集<sup>6)</sup>などを参考にした。

研究方法は変異が現れた原因を捜すことが主な目的であるから、民俗学的な接近方法を選び分析することにした。実際の対比方法としては両国の笑話を話素別に分類して対比、共通点と相違点を比較しながら、変異が現れた原因を明らかにし、できるだけ伝播の過程及び影響関係を推定してみようとするのである。

## II. 韓・日笑話の比較

### 1. 痴愚譚

痴愚譚は愚かな者に関する内容で、笑話の中心である。

主人公の性格に従って愚かな夫（息子、贅）、愚かな娘（嫁、妻）、最かな者、愚かな上典（奴婢に対しその主人の称）、愚かな兄弟で分類される。

#### (1) 愚かな贅

愚かな贅に関する話は種類も多様で、量も多いのである。

4) 成耆説『韓国説話の研究』仁荷大学校出版部、1988年、10ページ

5) 任東権『韓国の民譚』瑞文堂、1942年

韓相寿『韓国民譚選』正昔社、1974年

『忠甫民譚』蜚雪出版社、1982年

金光淳『駐北民譚』蜚雪出版社、1982年

崔来沃『全北民譚』蜚雪出版社、1982年

文化公報部『民譚民謡誌』忠清日報社、1983年

崔雲植『韓国の民譚』シンサ、1987年

6) 関敬吾『日本昔話集成』角川書店、1950 - 58年

『昔話と笑話』岩崎美術社、1968年

武田明編著『日本笑話集』社会思想社、1970年

『純日本笑話集』社会思想社、1982年

稲田浩二、稲田和子編著『日本昔話百選』三省堂、1971年

桜井徳太郎『昔ばなし』塙新書、1972年

野村順一編『昔話・伝説必携』学灯社、1991年

聾は「百年之客」と言われ妻の家では威信と顔を立てなくてはならない立場にもかかわらず愚かな行動をするので笑いの対象になる。

韓国：(1)

- a. 妻の家のキムチクッ（白菜キムチのスープ）があまりにもおいしいので夜はたかのまま外に出て、つぼの中に手を入れてキムチを取ろうとするが、手がぬけない。
- b. つぼが壊れ丈母が出て来るのでつい柿の木に登って行く。
- c. 出て来た丈母はついでに柿でも取ろうと棒を持って柿の畑に行く。
- d. 月光の下にぶらんと伸びているのをみて、棒で叩いても落さず新郎は痛くて糞をたしてしまう。
- e. 丈母は「あっ、弾けてしまった！」と言って部屋へ戻った<sup>7)</sup>。

韓国：(2)

- a. 新郎は昼に食べたトンチミ（キムチの一種、大根漬け）を思い出してこっそり台所へ行く。
- b. 壺の中に手をいれてトンチミをつまみ出して食べてから、頭を入れてスープを飲む。
- c. 頭を抜こうとしたが顎に引っかかって抜けないので、新婦に抜かしてもらおうと部屋に入ったが、柱にぶつかって大きな音がする。
- d. その音に家族みんな出て、はたかのまま壺を被っている新郎を見て棒で壺を叩く。
- e. 新郎は恥をかく<sup>8)</sup>。

日本：(1)

- a. 馬鹿聾が舅の家で柿をご馳走になる。
- b. 夜になってこっそり柿の木に登って食べる。
- c. 夜中になってその家の子供が柿が食べたいといって舅が柿を取りに出る。
- d. 月に照らして見るとぶち下がっているのがあって取ろうとしても折れなくて馬鹿聾は痛くて糞を出してしまう。
- e. 柿が熟れすぎといって孫に食べさせると孫は柿がくさいというので熟れすぎからという<sup>9)</sup>。

日本：(2)

- a. 聾が舅の家で高菜漬をご馳走になってとても甘いので夜にこっそり台所に行く。
- b. しこたま食べて禪に包んで肩に擔がうとすると、禪が上梁に引っかかっているうちに夜が明けてしまう。
- c. 聾は掛声までして引っ張っていると、舅は馬鹿聾に娘をあげるのはためだと返してもらおう。
- d. 聾は家に帰って友達の助けを求めまたそこに行って、それは地方の作法と言って婦人をかえしてもらおう<sup>10)</sup>。

上の笑話は聾が妻の実家で愚かな行動をしながら笑いを誘発させる内容である。主人公の聾の性格はたいてい愚かで融通性がなく、淳朴である。夫は自分が生まれた家に、ほかの所から嫁にきた妻に対し夫として、その限度内では権威を持っているが、妻のふるさtoに行くto融通性がない愚かな存在になる。

7) 任東権『韓国の民譚』瑞文堂、1942年、182ページ  
 8) 韓相寿『忠南民譚』堂雪出版社、1982年、185ページ  
 9) 武田明編著『統日本笑話集』社会思想社、1982年、

20ページ  
 10) 関敬吾『日本昔話集成』角川書店、1950 - 58年、120ページ

愚行の対象は丈人、丈母になって、背景は妻の実家である。丈人、丈母に聾はいつも難しい相手にそれほど頼もしく見えなくてはならないのに、むしろ愚かな行動をしながらもっとおどけに表すなど、また隠然たる中に聾をすこしでも気楽な関係になりたいという心理がはたらいたことがわかる。

背景では韓国と日本が同じく妻の実家で設定されるが、韓国では初夜、日本では舅の家に招待されていくという古い風習から来る差異点が現れるのである。

韓国の婚姻制度は結婚式が終わると新婦の実家で初夜を過ごす昔ながらの風習があり、お互いに親しみを感ずると共に新婦の家族に感謝と信頼を願う儀式として行ったが、いまだに残っている。

初夜と言うと新郎はまだ新婦の家族だちとはあんまり親しくないのに、食物を欲しがるとするのは恥ずかしいことである。主人公が聾だから当然ながら背景は妻の実家に設定されるうえ、そこにもっと笑話的な事件として初夜が設定されたと言える。

日本の笑話は聾が妻の家に招待された後起こす愚行を取り扱っている。古代日本の婚姻制度は、今の婚姻制度と違って結婚後新婦は2、3年ぐらい親家に留まっていた、新郎が新婦の家に通う生活をして、子どもが歩くぐらいの頃になると夫の所に引き移るのである<sup>11)</sup>。このような婚姻制度の形態から馬鹿聾の笑話が発生したのではないかと考えられる。

素材を見ると、韓国ではキムチクッ、トンチミが、日本では柿と高菜漬が現れている。

日本の漬物は野菜を貯蔵しておくという志か

ら発達したもので、この味のうまい家の主婦は評判になるので、各家にとってこれは甚だ苦心の食糧であった<sup>12)</sup>。

韓国のキムチが各地方と家によって味が違うのと同じく、日本の漬物も日本を代表する食物である。

愚行の過程と結果を見ると、韓国の(1)では食物を盗んで食べて、手が抜けぬから愚行を起こすが、その愚行は誰にも見つからなくて、(2)も食物を盗んで食べて壺の中から頭が抜けぬので新婦に抜かしてくれとするが、その愚行が新婦の家族に見つかって恥をかくという場合である。

韓国の二つの笑話を見ると、聾を愚かに表現しながらその愚行を現れようとするのは同じであるが、愚行の過程と結果に違うことが解る。ここで(2)の笑話が(1)の笑話よりもっと原型に近いと言えるのだが、口伝される間、忘却によって内容的な変異が起こり、それにしたがって自然に挿入と添加、潤色の作業が後に現れるところ<sup>13)</sup>からその理由があるとも言える。

(2)ではトンチミがあんまりおいしいから盗んで食べて、壺の中から頭が抜けぬので抜けてくれとしたが、恥をかくというごく単純な構造を持っている。しかし、(1)の場合、キムチグッがあんまりおいしいので盗んで食べようとする部分では(2)と同じであるが、見つかると柿の木に登って行く部分、偶然の一致で丈母が柿を取ろうとする部分、新郎があんまり痛いので糞を出してしまうという部分、柿が弾けてしまったとそのまま部屋に戻って行くと言う部分などを設定して笑いを催すとする意図が感じられる。

次に、日本笑話の愚行の過程と結果を見ると、

11) 福田アジオ、宮田登編『日本民俗学概論』吉川弘文堂、1983年、115ページ

12) 和歌森太郎『日本民俗学』弘文堂、1963年、208ページ

ジ

13) 崔雲植『韓国説話の研究』、1971年、54ページ

(表1)

愚かな聾の韓・日比較

	主人公	背景	対象	素 材	愚 行 の 過 程	結 果
韓国(1)	聾	妻の 実家	丈母	キムチ クッ	食物を盗んで食べようとし たが手が抜けない	○
韓国(2)	〃	〃	家族	トンチミ	食物を盗んで食べようとし たが頭が抜けない	恥をか く
日本(1)	〃	〃	丈人	柿	柿を盗んで食べようと柿の 木に登って行く	○
日本(2)	〃	〃	〃	高采漬	食物を盗んで食べて部屋に 戻ろうとしたが罫が引っか かる	妻を再 び向か える

(1)では単純に柿を食べたいから柿の木に登って愚行を起こるが、韓国の(1)と同じく誰にも見つからない、(2)では食物を盗んで食べて見つかって妻を取り返されるが、友だちの助けを求めまた妻を迎え入れるようになる。

日本の笑話も(2)に比べもっと笑話的要素を持っている(1)が後代のものであることがわかる。

韓国の(1)と日本の(1)は素材だけが違うし同じ内容で結末部分で日本の笑話は糞を柿に間違っ孫に食べさせると言うもっと笑話的な特徴を現した。

以上の韓国と日本の笑話を比較し、図式化して見ると、(表1)のとおりである。韓国と日本の笑話の共通点は聾を主人公として登場させながら自然に妻の実家を背景にし、丈人、丈母とその家族たちが愚行の対象に設定されることである。相違点は素材の面で各々韓国的、日本的な傾向を濃くにおわすキムチと漬物を設定されたところである。

両国とも主人公が聾に設定され、威信を立てなくてはならない妻の実家で愚行をやらせて笑いを誘発させると言う内容は同じである。しかし、韓国では聾を「百年之客」と言うぐらい

難しく感じた丈人、丈母が聾を少しでも気楽に感じようとする思いから上記のような笑話が生じた。日本では結婚後にも新婦を実家において出入りしながら他所者での生活を甘受しなければならなかった婚姻制度の形態からできたと言うところに各々差がある。

## (2) 愚かな兄弟

愚かな兄弟の物語は愚行の相手もやはり兄弟で現れていて、累積譚の形式を含んでいる。

### 韓国：(1)

A. 弟が捕まった獣を放してやる。

- a. 兄弟が寡婦が罾で狩りをして暮らす。
- b. 兄が弟になにかが掛かったら捕まえてこいという。
- c. 弟が稚を鶏に、ノルを犬に間違っ放してやる。

B. 弟が母を殺す。

- a. 兄が罾に掛かっているのはぜんぶ捕まえてこいという。
- b. 母が便所に行って来る途中に掛かったので弟が殺して引っ張ってくる。

- C. 母の葬式をする。
- a. 葬式をする穀物が無いので隣へ盗みに行く。
  - b. 弟のせいで見つかってしまう。
  - c. 事情を説明し蕎麦を頂いて葬式をする<sup>14)</sup>。

韓国 : (2)

- A. 兄弟が盗みをしたが見つかってしまう。
- a. 父親の祭日に穀物が無いので隣へ盗みに行く。
  - b. 兄のせいで見つかってしまう。
  - c. 願う通りに各々罰せられる。
- B. 愚かな兄
- a. 事情を説明し穀物を頂いて葬式をしようとする。
  - b. 弟が僧をつれてこいと言ったが、兄が烏と鶯をつれて来る。
  - c. 弟が直接行きながらあずき粥を奥深い器に入れておけと言ったが、雨垂れで深く掘られた地に注ぐ<sup>15)</sup>。

日本 : (1)

- A. 馬鹿息子が獣を放してやる。
- a. ふじという馬鹿息子が餌かけをしている。
  - b. 鶏がかかったのに放してやる。
- B. 馬鹿息子が母を殺す。
- a. 父親がかかったのはなんでも捕まえてこいという。
  - b. 母が誤ってかかったのに強く押して死んでしまう。
- C. 愚かな息子(1)
- a. 葬式をしようと和尚を呼んでこいと言いつけたら烏と赤犬を和尚に間違える。

- b. 父親が麴を買いにいった間に和尚が小僧をつれて来る。
- c. 先の事を思い出して棒で叩いたら泣きながら逃げていく。

D. 愚かな息子(2)

- a. ふじは酒が沸いたか聞いてみろと言った父親の事を思い出して耳を澄ましみると、ふじという音が聞こえて返事をする。
- b. ふじという音が限りなく続くので腹が立って斧で打ち割れてしまう<sup>16)</sup>。

日本 : (2)

A. 愚かな弟(1)

- a. 母親が死んだので兄はぶつに和尚を呼んでこいと言ったら、烏とおんどりに間違える。
- b. それをみてご飯を炊いていた兄が出かけていく。

B. 愚かな弟(2)

- a. 火を焚いていたぶつはご飯がぶつぶつと言うので自分を呼んでいると思って返事をする。
- b. いつまでもぶつぶつと言うので腹が立って灰を入れてしまう。

C. 愚かな弟(3)

- a. 和尚に蜂蜜でも上げようと二階の瓶の中の蜂蜜を出して落とさないようにぶつに言いつけたけど落としてしまう。
- b. なにも上げるものがないので、風呂でも上げようとぶつに風呂を焚いておけと言ったら、和尚の衣まで焚いてしまう<sup>17)</sup>。

上記の韓国の笑話を見ると、(1)と(2)の笑話の中に似ている motif があることが分かる。即

14) 申月均「韓国笑話研究」仁荷大学校大学院修士論文、1981年、37ページ

15) 同上

16) 関敬吾『昔話と笑話』岩崎美術社、1968年、75ページ

17) 武田明編著『日本笑話集』社会思想社、1970年、49ページ



(表 2)

愚かな兄弟物語の韓・日比較

	主人公	対象	愚 行 の 過 程	累 材	形 式
韓国(1)	弟	兄	獣は放してやって母をつかむ	雉、ノル、母	累積譚
韓国(2)	兄	弟	盗みをして見つかる→僧代わりに鶯と烏を連れて来る→あずき粥を地に注ぐ	烏、鶯、あずき粥	〃
日本(1)	息子	父	獣を放してやって母をつかむ→僧を烏と赤犬に間違う→酒を斧で打ち割れてしまう	鶏、母烏、赤犬、酒	連鎖譚 累積譚
日本(2)	弟	兄	僧を烏とおんどりに間違う→ご飯に灰を入れる→蜂蜜の壺を割れてしまう→僧の衣まで焚いてしまう	烏、おんどり、ご飯、蜂の壺、僧の衣	累積譚

ち、葬式をするため隣の家に穀物を盗みにいく部分、人に見つかった後、兄弟が一緒に塀壁にもたれて隠れているが、その人がそこに放尿をすると、兄（弟）が“あっ、あつい”と叫ぶので見つかってしまうと言うところが同じである。また、この時、やはり共通的に人がとても善良な人で、事情を聞いて気前よく穀物を上げる。日本の笑話の(1)では韓国の(1)、(2)の話が連鎖譚で現れているが、葬式をするために盗みにいくと言う部分はなく、代わりに自分の名前と食物を沸かす時の音が同じなので愚行を犯す部分が現れ、(2)の笑話では(1)の愚かな兄の部分は同じで、愚かさを強調する部分が共通的に現れている。

このような共通点からみると、各 motif の間の関係が緊密に接触しながら物語の構成に影響を与えていることが分かる<sup>18)</sup>。

主人公としては兄弟が現れているが、主人公が兄か弟かと言う点はあまり問題にならず、一方は状況をひいていく能動的な位置にあるし、もう一方はそれにしたがって受動的に引っぱれていく消極的な位置にありながら愚行を起こす

のである。愚行を犯す兄（弟）は自分の意志と主観が全くなくて相手が言うことを額面そのまま受け入れて愚行を犯し、葬式に対する関心と責任意識は少しもなく無気力、無感動であり被動的に存在するが、このようなところが、彼らを愚かな行為の主人公として求めている。

両国の笑話で葬式をするために僧が登場する。日本では平安時代（794-1192）以後隆盛になった阿弥陀信仰が死後世界に対する不安を取り除いてくれ、仏教者が現れて葬送を儀礼化し、今日見られる葬送儀礼が成立したと言う<sup>19)</sup>。

形式を見ると、韓・日の笑話ともに累積譚の形式を内包しているが、日本の1)は連鎖譚いながら累積譚の形式を取っている。

連鎖譚はそれが個別的に独立され語ることができるので話者によってはいくらかでも加減が可能である。即ち、登場人物が同じ場合とその立場が同じ場合にはまったく独立された物語だったとしても話者の能力により、連鎖譚に変わることができる。

両国の笑話を比較し、図式化してみると、(表 2) のとおりである。

18) 申月均、前掲書、38ページ

19) 福田アジオ、宮田登編、前掲書、123ページ

(3) 鏡を知らない人々

鏡を知らない人々の話はたくさんの類話を持っている。

新しい物をはじめて接する人だちがやらかす愚行が笑いの素材になる。

韓国：

- a. ある士人が科挙（官寮になるための国家試験）を受けるためにソウルにいった鏡を買って来る。
- b. たくさんのお金を払って買ったためにかくして一人でみる。
- c. 妻がおかしいと思って夫が外出した間に見ると、女の姿が見えて姑に持っていく。
- d. 姑が見ると老婆が見えて隣のおばあさんがここにいるという。
- e. 舅が見て父親という。
- f. 妻がまた見るとやっぱり若い女がそのままいるので腹が立って鏡を割れてしまう<sup>20)</sup>。

日本：

- a. ある孝子が父が死んで悲しんでいた。
- b. 江戸にいった鏡を見ると父が見えるので驚いて鏡を買って帰る。
- c. 仏壇に挙げて毎日拝んでいると妻が覗いてみる。
- d. 女の姿が写っていった喧嘩をする。
- e. そのとき尼さんが来て理由を聞いて鏡を見ると尼が見えて「女はもう改心して尼になりましたからかんべんしてやってください」という<sup>21)</sup>。

この「不識鏡説話」の物語はたくさんの類話

を持っている。妻が毎日鏡を見ながら夫に妾がいると信じて、“このようなまズい顔でどうやって夫を惚れ込んだんや”と悪口を言ったが、口答えもなしに口つきだけ真似するのが腹が立って拳で壊してしまう話もある<sup>22)</sup>。日本では孝子が鏡を櫃に隠して一人でみるのを妻が見てやきもちをするが夫は父親を買ってきたと言う。一賭に見たら父親が若い女子と一緒にいるので嬉しくて手まめにお金を稼ぐという話もある<sup>23)</sup>。

韓国と日本の笑話を比較してみると、登場人物と結果が違っただけで内容は同じである。

韓国では一般的な人物が登場する反面、日本では孝子が登場する。

中国の説話でも一般的な人物が対象になっているが、これは中国から韓国を渡って日本へ伝播されながら主人公が一般的な人物から特定な人物に変異されるのではないかと推定してみるのができる。

結果をみると、鏡を始めてみることで極端的な自己方式により事件を受け入れて行動するようになるが、韓国では鏡をぶち壊すことによって補償心理を受けることと日本では比較的の良い結末として現れる。そして、日本では孝子が主人公として登場することに似合うような良い結末は意図的に付けられたことではないかと考えられる。これは韓国と中国の結末とは相違点として比較される特徴の一つである。

内容を見ると、日本ではただ鏡を知らない孝子夫婦、その自体に笑話的な性格を付与して笑い飛ばしているのに対し、韓国では両班階級（高麗、朝鮮時代の支配階級）を登場させて彼らを嘲笑している。

民譚が民衆の文学として、主に民衆を通じて話が創作、伝播されたことを考えて見ると、韓

20) 任東権『韓国の民譚』瑞文堂、1942年、24ページ

21) 武田明編著、前掲書、58ページ

22) 申月均、前掲書、49ページ

23) 関敬吾、前掲書、44ページ



(表 3) 鏡を知らない人々の物語の韓・日比較

	主人公	愚行の糧類	愚行の過程	素材	結 果
韓国	家 族	誤 解	鏡を知らない	鏡	鏡を割れてしまう
日本	孝子夫婦	〃	〃	〃	尼が裁判

国の笑話は上典を愚かに表現し、快感と自感を感じようとしたとも考えられる。

この笑話を比較し、図式化してみると、(表 3) のとおりである。

## 2. 智略譚

智略譚はうそか智慧で相手をごまかすか酷い目に合わせて、他人の重苦しいことを解決してくれるなどの話である。それがもし詐欺性があるとしてもいろいろな智略から感じられる笑いが笑話の主軸を成すのである。

### (1) 和尚と蜂の瓶

この笑話は上座僧が和尚を酷い目に合わせると言う、機智を motif とする話である

韓国：

- 和尚が蜂の瓶をかくして置いて一人でこっそり食べる。
- 上座僧には食べたなら死ぬから触れないように言いつけて置く。
- 和尚が外出した間に上座僧は蜂を全部食べてしまって和尚が大事にする硯石も壊して横になる。
- 和尚が帰ってきて理由を問いたら、「和尚様が大事にする硯石を壊して恐れ入りますので死んでしまうと思って蜂を食べていま死ぬのを待ってます」という<sup>24)</sup>。

日本：

- 和尚はいつも瓶の中に何かを入れて置いて食べている。
- 上座僧が訪ねてみると毒が入っているからぜったい振れないように言い聞かせる。
- 和尚が外出している間に上座僧がなめてみたら甘いので全部食べてしまう。そして、叱られることを恐れ、妙案を思いだし和尚の大事にする花瓶を壊してしまう。
- 和尚が帰ってきて鳴いている上座僧に理由を問いたら、「花瓶を落とし割れて死んでしまうと思い瓶の中の毒を全部食べたのだが、死なないので泣いております」という<sup>25)</sup>。

この笑話は幼い上座僧に和尚がひやかしを受けると言う話で素材は全部食物で現れる。

大体笑話は食物と関係する。本来一つの家族生活では食物は共同に、同じ物を食うことが家族を結合させる重要な要件である。したがって人にかくれて一人食いするのを小鎚立てとか、まなべぐい、まぐらいなどといって軽蔑する習慣がある。この笑話では和尚が一人で飲食を食べようとしたので当然軽蔑の対象になるのである<sup>26)</sup>。

この笑話の妙味といえるものはそれを膺懲する人物にある。普通の一般的な観念からみると地位がもっと高い人物が低い人物を膺懲するの

24) 成耆説『韓日民譚の比較研究』、1979年、207ページ

25) 同上

26) 関敬吾、前掲書、180ページ

が当然なのに、ずっと地位が低い上座僧が和尚を膺懲するということにその美学的妙味がある。

閑敬語は笑が制裁的な効力をもつ時代には、笑は暴力を用いない攻撃の手段といった。また、攻撃の効果は、強い相手を倒した時がもっと愉快であろうが、笑もまた笑うになる相手を笑殺したときがもっとも愉快に感ずるものだった<sup>27)</sup>。

まず、登場人物をみると、和尚と上座僧であるが、このような類話はかなり多いのである。

このよう笑話は単純に上座僧の智慧譚だけで生成することではないと考えられる。僧侶と言うものは仏陀經典の威力を説法して極楽浄土に至る手引きの役割をする存在なのに、いつの間に専横で墮落した姿をみせる彼らに上座僧を通じて進退幽谷の境地に責め立てて彼らを警告しようとするが見られる<sup>28)</sup>。

仏教が538年に日本へ伝播され、それにしたがって仏教文化が伝播されたのを考慮したら<sup>29)</sup>説話の伝播も殆ど同じ時期になるのではないかと推測される。また、仏教が盛況を呈するのに対して墮落した姿を見せないようにこのような風刺的な笑話も生成したと思われる。

## (2) 子供の智慧譚

民譚の中でおどけた言動を内容とする話の中には「智慧」に関する話が多いが、この「智慧」の所有者が思いかけなく子どもだちで現れる場合が数多く発見される。

### 韓国：

- a. 新婦が初夜を放れると新郎が新婦を追いつ

出す。

- b. 当日懐妊の兆しがあって男子を産んだが、その子が9才になって父親に関して聞くと金政丞（ジョンソン：大臣）か父親であることを話す。
- c. 父を捜しにソウルにいた子は「夜に蒔いて朝に取るきゅうりの種を買ってください」といって、「尻を一度も放らない人が取らなくてはならない」と言う。
- d. 金政丞が一生尻を一度も放らない人はないということ、子が母の話をする。
- e. 金政丞は母と子を再び迎え入れて豊かな生活をする<sup>30)</sup>。

### 日本：

- a. 王様が尻を放った妻を息子と一緒に船に乗せて海に流す。
- b. 息子が大きくなって友達に父がない子と言われて笑われるので、母に父親に関して聞くと聞かせてくれる。
- c. 13才になった息子は暇をもらい、王様の城の門前で「金になる茄の種はいらん」と叫ぶと、彼を呼んで聞くと、「尻を放らぬ女が蒔かぬばならない」と言う。
- d. 王様がそんな人間はないと言うので母の話をする。
- e. 王様は母子を引き取って自分の後を取らせた<sup>31)</sup>。

上記の笑話は息子が母を救い出す物語である。

その類話の内容をみると、韓国では“きゅうりの種”の代わりに“かぼちやの種”が素材として現れ、“尻を放れない人が取ると一日二ぞ

27) 同上、164ページ

28) 成書説、前掲書、212ページ

29) 成書説『韓国説話の研究』、97ページ

30) 文化公報部『民譚民諸誌』忠清日報社、1983年

31) 閑敬吾『日本昔話集成』、525ページ

るずつ取れるかぼちやの種があるよ”と叫ぶ語  
りもある。日本では“なす”の代わりに“木”、  
“花”、“瓢箪の種”などに現れるが、上の笑  
話と同じく全てが金に変わって現れる。

この笑話では共通的に夫の間違った処分にな  
んの批判も不満もせずに妻は家を出るそして、  
子どもが成長して全ての事実を知ってしまい、  
父親からみると弱者である息子とその父親の間  
違いを覚醒させる。即ち、弱者にも学識と智恵  
があるのを示して、彼らの存在を無視してはい  
けないことを思い知らせている。

ここでの「父」と「息子」という用語を広い  
意味で見ると、「支配風」と「被支配風」の関  
係として解釈することができる。

即ち、支配層の場合は日本では王様で、韓国  
では政丞で設定されるし、被支配層の場合、妻  
と息子が設定されていることが見られる。間違っ  
た判断にもかかわらず勝手に権力を濫用するこ  
とに対して、抑圧された被支配層の蓄積された  
智恵で彼らの間違った判断と一方的な思考を覚  
醒させている。

即ち、被支配層は自分だちの智恵が権力層の  
間違いを覚醒させるのができるというこんな笑  
話を通じて補償的な満足を感じるし、暮らしに  
くい現実に処する自分の立場を自ら慰労するこ  
とができたと考えられる。

### 3. 誇張譚

誇張譚は現実ではありえない話を誇張、表現  
してあきれる笑いを起こす根拠のない話である。

#### (1) 夫婦争餅

夫婦争餅は夫婦の間に餅を置いて我慢比べを  
する話である。

韓国：

- a. 若い夫婦が隣からもらった祭りの餅を食  
べて、一つしか残ってないので、先物を  
いう人が負けることに賭をする。
- b. その時、泥棒が入って物を全部つづんで  
妻まで連れて行こうとする。
- c. それを見ながらにも言わない夫に腹が  
立った妻が先いうと夫はすぐ餅を食べ  
る<sup>32)</sup>。

日本：

- a. 爺と婆が隣から餅をもらって食べて、一  
つしか残ってないので賭をする。
- b. 夜になって泥棒が入って荷造りをして逃  
げようとしたが餅を見て取ろうとする。
- c. 婆はそれを見て叫ぶと泥棒は荷物を置い  
て逃げてしまって、爺が餅を食べる<sup>33)</sup>。

一つでももっと食べようとする欲張りを表現  
したこの笑話の構造はとても簡単である。

最後まで口をつぐんでいる方が食べるように  
賭をする。勝った方がその残りの餅を食べられ  
るという話である。

主人公の行為は子どもみたいに単純な所から  
始まるので、この民譚では単純性を誇張させ笑  
話の一つの要素としている。

この話は内容が同じなので、ただ日本では妻  
をさらうとする部分が餅を取って行くのに変わっ  
て現れる。

韓国と日本の相違点は素材の餅が特色だが、  
日本では変わった特徴はないが、韓国では祭り  
の餅として現れる。祭りの後は祭りで使われた  
食物を全ての村に分けて食べると言う風習があっ  
たことに經由したのではないかと思われる。

32) 韓相寿、前掲書、70ページ

33) 関敬吾『昔話と笑話』、466ページ

日本の夫婦争餅は「沙石集」に収録されている。ところがこの本が1283年に編纂されたのを考えてみると、仏教が538年に日本に伝播され、約750年間の仏教伝播期に仏教文化が継続的に日本へ渡って行ったのを勘案してみるとこの笑話は韓国から日本へ伝播されたと思われる。

## (2) 屁

屁を motif とする物語は多数の類話があるが、屁自体の物語を極に誇張して笑いを誘発する特徴を持っている。

### 韓国：

- a. 嫁の顔色がますます黄色くなるので舅が心配になりそのわけを聞くと、屁を我慢しているからであると言う。
- b. 舅が気づかず出しなさいと言うと家が振るえるほどの屁を放ってしまい嫁を実家に追い出すことにする。
- c. 実家に戻る間、商人だちが梨を取ろうとするがあまりにも高いので嫁が屁を放って梨を取る。
- d. 舅が福屁だと言い嫁を再び向かいに行く<sup>34)</sup>。

### 日本：

- a. 嫁の顔色がますます黄色くなるので姑が心配になりそのわけを聞くと、屁を我慢しているからであると言う。
- b. 姑が気づかず出しなさいと言うので屁を放れと姑が屁に吹き上げられ天井の梁にぶつかって腰骨のけがをする。
- c. 実家に帰る途中に7人の牛方が梨を取ろうとするが、一つも取れないので嫁と賭

をする。

- d. 嫁は屁を放れ梨を取って、牛21匹と米七駄、布七駄、魚七駄合わせて21駄の荷をもらう。
- e. 夫は嫁を連れ戻して幸福に暮らした<sup>35)</sup>。

笑話の内容はたまたま極端にまで発展して屁が話題になる時もあるが、この屁は愚かな嫁と結び付けた物語が上の笑話である。

主人公は先の愚かな嫁の物語と同じように韓国では嫁と舅、日本では嫁と姑の関係に現れる。

嫁の立場からみると、最も難しい相手は舅、姑である。屁は一般的にとても恥ずかしいことと認識されている。しかし、最もしにくい相手の前で屁を放るという恥ずかしい行為を行うことは逆説的にそのような行為を正当化させるための意図とも考えられる。即ち、舅あるいは姑の前でできる行動の制限を表現しながら嫁の行動をより自由に広げようとする意図が含まれていると言えるだろう。はじめはそのような嫁の行動が受け入れられないので嫁の実家に追い出すことにするが、結局福屁として認められ再び向かいに行くことがそのような意図を現れるところであると言える。

その内容をみると、屁があまりにも強くて実家に帰る途中に梨を取る話は同じだが韓国では梨の木の下で休んでいる内に商人だちの話を聞き王様に差し上げるため、日本では賭をすることとして各々その理由が違うのである。梨を取る行為は直ちに嫁が夫の家に再び帰られる原因として作用する。

韓国では薬梨を取り王様に差し上げて自分の屁の病気も治して夫の家に帰るが、日本では賭のために梨をとって牛と荷をもらって夫の家に

34) 任東権、前掲書、64ページ

35) 関敬吾『日本昔話集成』、157ページ

戻って行く。

日本の笑話で特異な点は、地方によって結論部分に嫁を家に連れて来て屁をきわずに放るように別の部屋を建ててあげるが、これが今の部屋の起源であるところが添加されていることだ。

即ち、屁を放る意味で‘屁屋’と書いて‘へや’に発音し、部屋という日本の字の発音も‘へや’であるから物語を作るためにこのようなところが付けられたことと思われる。

上の両国の笑い話では嫁と舅及び姑が主人公として設定され、以前の不自由な嫁の立場に対し隠然たる中に反発を加えていると言える。

また、そのような不自由な立場で行動の制約を受けている彼ら自身の不満を表現するために、自分自身を笑いの主人公として設定し逆説的に表していることと考えられる。

#### 4. 共通点及び相違点

いままで韓国と日本の民譚の中で笑いを誘発する笑話を痴愚譚、智略譚、誇張譚などの三つに分けて比較分析してみた。

その結果、両国の笑話の間には地理的条件及び仏教の伝播による関係が深く、相互が与えた影響による類似点が少なくないことが分かった。

民譚が伝播されその地域に定着するためにはその地域の社会的、文化的慣習あるいは信仰などに融合され変化した形として現れる可能性を持っている。

そのような前提下に両国の笑話の共通点と相違点を形成する根本的な要因を明らかにすることができるだろう。

全般的な社会の制度及び構造による意識状態の類似性による内容の同質性を共通点として上げられる。

痴愚譚の例文のように嫁と姑の複雑な関係に

対する消極的な反抗、即ち、婚姻制度で現れる不合理に対する反抗、そして智略譚では和尚と蜂蜜の瓶という物語で現れる和尚が上座僧によってひどい目に合う語りを通じて墮落した仏教に対する警告、子どもの智慧譚で現れる支配層と被支配層の関係、即ち、権力の濫用によって抑圧される被支配層の迂回的な風刺など諸制度及び構造に対する意識状態が似ている。従って、物語に現れる付随的な素材は変わることもあるが、その物語の根本的な内容は変わらないこととして現れる。

このように諸制度及び構造に対する不満あるいは抵抗を直接的に表出することができず民譚を通じて迂回的に表現することで、民衆あるいは被支配層の人々は現実からの解放感と所願充足の自己満足を味わう一方、厳しい現実にいる自分自身の立場を自ら慰めながら心の気を取り直したのであろう。

両国の相違点と言えば、主な motif には変わりはなく、motif を囲んでいる外形的な構造あるいは題材が変わるところであると言えるが、このようなことは各国あるいは地域の風習及び民族の独特な性格にその基盤をおいてある。

愚かな聲に関する物語の場合、韓国ではキムチが、日本では高菜漬がその素材として現れるし、子どもの智慧譚では権力層の象徴的な人物として政丞と王様が現れるところと、そして誇張譚の夫婦争餅の物語では餅という素材が韓国では祭日の餅として現れ韓国的な特色が見られる点などが相違点として上げられる。

### Ⅲ . 結 論

いままで韓・日両国の笑話の中から類似した笑話8話を任意に選んで比較分析してみた。

笑話は笑いを与える短編的な物語で、現実生

活より取材し、現実生活に即応して語るものであるから、各民族の機智・諧謔・趣味などがよく現れている。

本研究の論議の出発点はこのようなところに焦点をあわせ説話の変化要因が民族の特性とどのように結び付けて現れるかを明らかにすることであった。その結果を簡潔に整理すれば次のとおりである。

一つ、両国の笑話に共通点が現れるのは、一般的に接する両国の制度と構造に関する意識状態が類似しているからである。即ち、社会的風習による家族制度から現れる不合理に対する反抗、墮落した仏教に対する警告、権力の濫用について抑圧を受ける被支配層の風刺などが笑話を通じて現れている。

こんな制度と構造に対する抵抗を民譚を通じて表出することになって現実でできない事に対して補償的満足を感じて、快感と自慰を感じたことは推測するに難しくはない。

二つ、相違点が現れる場合である。

民譚がある地域からほかの地域へ伝播されていく時、その国に定着するためにはその国の民族的な特性と結び付けて現れるために、その国で比較的良好に知られている物を引き出すようになる。笑話に現れる民族的な特性の中にこんな点が確認された。即ち、食物が素材として登場する場合にその食物が両国に特色があるという点、権力層の象徴的な人物として韓国では政丞、

日本では王様が現れることと、王様に対する韓国と日本の観点が違うという点などである。

三つ、本論で比較した両国の笑話 8 話の伝播及び影響関係を分析した結果、次のような推定をすることが可能である。

(1)中国から韓国を渡って日本に伝播された場合、仏教的な傾向が強い笑話（和尚と蜂の瓶）、仏典からその出典が見られる笑話（鏡を知らない人々、夫婦争餅）。この笑話は中国から韓国に入ってきて部分的に変異を起こしたか、あるいはそんな時間的な余裕なしに日本へ渡り、彼らの思想と感情によって潤色されたと考えられる。

(2)韓国と日本で独自に発生したと見られる場合（愚かな聾、愚かな嫁）。この笑話は両国の風習及び思考方式が似ている場合独自に同じ内容の話が発生することが可能であると考えられる。

(3)韓国が日本に影響をかけた場合（子供の知慧譚）である。

以上のような両国の笑話に現れた共通点と相違点を検討して来たが、このような共通点と相違点が現れる理由は両国の制度的慣習による意識状態が似ていることと、一方は民族的環境と特性によるものであることが明らかになった。